

ぶら



探訪

備陽史探訪の会

「拾貳」

福山西(今津町)を歩く 「パート2」

案内者 岡田 宏一郎

平成 25 年《2013》6 月 1 日(土) 午前 9 時 「松永駅前スタート」

ぶら探訪歩きの始まりです。

気持ちよい初夏の風に体を包まれ「ゆったり、のんびり ぶら探訪」を楽しみましょう。
田園風景にも親しみながらの街道歩き、句碑や石造物、辻堂・井戸などなんでもない物にも目を注いで楽しみましょう。

探訪コース地図



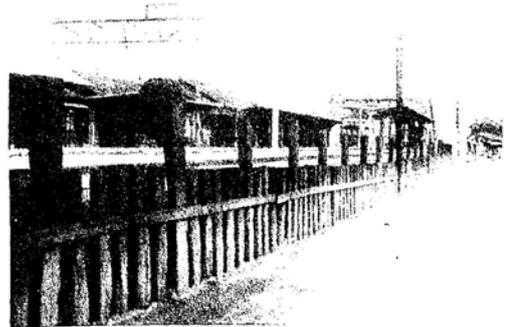
この写真に従って歩いていきます。建物や道筋も観察しましょう。



松永駅。昭和44年に橋上駅として建替えられ、南北の通路として便利になった。



松永駅前商店街。南口がメインになって寂れてしまった。商店街は今津町になる。



駅南側から見た昔の松永駅（昭和30年ごろ）
右側（南方向）に松永高校があった。



前回（第1回ぶら探訪松永西歩き）のとき、大正通りから国道に出た時、レトロな建物の陶器屋前の通り北上したが、今回もここを進んで行く。



戦前を感じさせる農業倉庫らしい建物を見ながら進む。
ここから前回、通ってない新しい道に行く。



やがて郊外地らしい風景となってきた。



畑の土地も見られる街道をのんびりと行く。



左の道に入るとお堂がある。



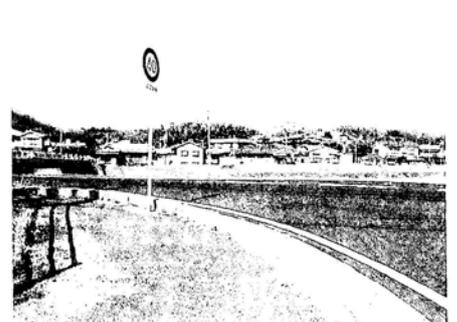
今も街道らしい風景を残す商店がある。



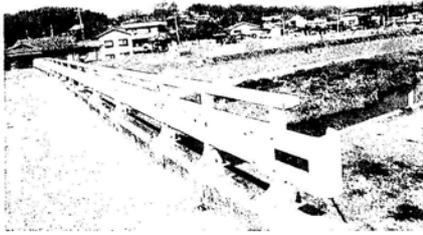
商店の倉庫に地元の造酒屋の酒「千萬喜」の銘柄と昔懐かしい「ダルマ焼酎」の名前がまだ残っている。こんな路上観察も自分は面白いと思う。



ここから左に折れて、土手道に出る。



土手道に上がる。左の橋を渡る。



これが本郷川に架かっている「長波橋」である。向うに大きな樹木が見えるが、あそこが「村上家住宅」である。また「長波の辻堂」も見える。



「為安堂」ともいっていた、長波の辻堂を下って進む。辻堂には二体の地蔵仏と首無し地蔵が祀られている。寄附札には「嘉永年間建造 昭和四拾九年四月移築」と書かれている。



これが今津で唯一残っている「長波の辻堂」である。



山の上の尾根道が、今津町と神村町の境界で、境界になる道のすぐ横に「松本西古墳」がある。(左の樹木あたり) 以前は今津町の集落「矢捨」の名前を付けて「矢捨古墳」と言っていたが、神村側になるので松本西古墳に改められた。



村上家住宅（国の登録有形文化財）

村上家住宅公開

「村上家住宅」について

松永湾を見下ろす高台にある「竹本屋」と呼ばれていた村上家住宅は高度な技で築かれた高い石垣がまず目につく。(江戸末期) 母屋(旧客殿、明治後期)と土蔵造りの衣装蔵(江戸末期)、米蔵(江戸末期)、寺子屋として使われていた納屋(明治後期)、長屋門(江戸末期)など、当時の屋敷構えが良く残っている。「松永地域が江戸時代塩田を中心に発展したことを示す建築物」である。



今津町長波の村上家の住宅が公開された。立派な石垣と土塀が見事である。



長屋門(江戸末期)と離れの居宅。右端は物置。



長屋門を入ると、水彩画が飾られていた。これは主屋の絵である。



衣装蔵と米蔵。右の建物は納屋。



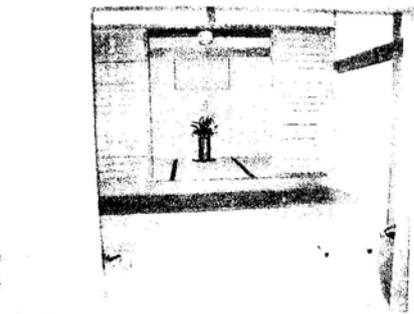
腕木門を入ると主屋の庭になる。



昭和十一年当時の今津町の写真が飾られていた。正面の小高い丘に薬師寺がある。



入母屋造りの檼瓦屋根の木造二階建て住宅。明治後期に接客用として建てられた。



主屋の玄関



正面が土蔵造りの衣装蔵と米蔵。



長屋門を入ると広い庭になる。主屋の屋根が見える。



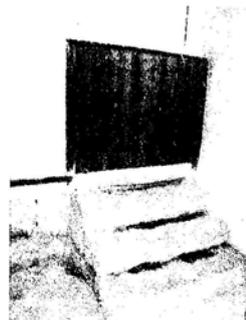
主屋を西側から見たところ。建物は明治後期のもの。



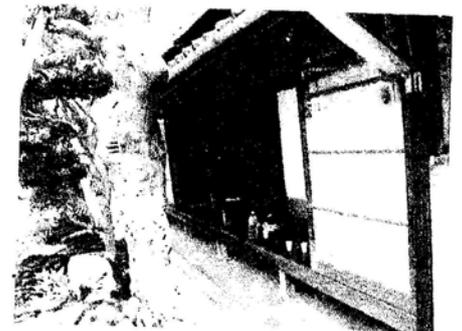
腕木門を入った庭と今も住んでいる居宅。庭には水のない池がある。市教委文化課よりは話しを聞く。



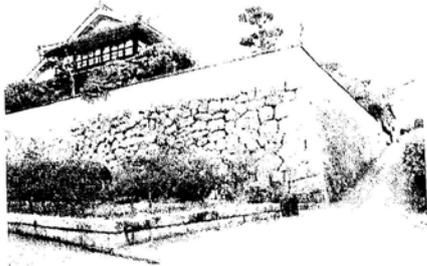
納屋には農業に使う道具や品々が置かれていた。



米蔵に入る入口。



長屋門西側の居宅。寺子屋として使われた。



高い石垣の屋敷が「村上家住宅」で、
国登録有形文化財となっている。
製塩関連産業や回船業を営んでいた。



裏門と衣装倉。



この道は東村に通じる旧道だが、松
永バイパスで切られている。



村上家住宅と常夜灯を見て、下ると水田
が造成地になりつぶされている。

坂を上っていくと東村に通じる旧道の峠に
常夜燈がある。「安政五年」の刻銘と石工
の名前があるが名前は読み取れなかった。



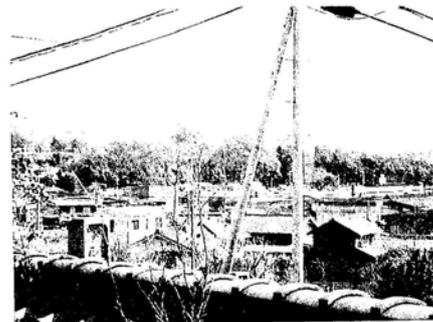
向こうの山に「長波古墳」がある。



すぐ向こうに「葉粉池」がある。電柱の
向こうの丘陵に「長波古墳」がある。(
この池までは行かない)



善性寺。平櫛田中の養家（平櫛家）の
墓があるが、寄せ墓となっていて住職
にも分からないという。



境内から見た風景。電柱の向こうに見え
る学校は、この後、「三吉傾山・冠山」の墓
にも行くが、その「私塾大成館」にあやか
り名前を付けた「大成館中学校」である。

吾妻橋西詰北にあった「辻堂跡」

十王堂とも仁王堂とも云っているが訛って「地王堂」とも呼ばれることがある。老朽化したために壊された。修理に要する費用の捻出が困難だったことが考えられる。辻堂の内部には地蔵仏が安置されていて、蓮華寺や薬師寺の住職によって祀りが行われていた。

『備陽六郡志』(第二卷)には「今津村に辻堂八ヶ所、西町、東町、東の端、下の堂、堂河内、坪のもと、彌助が下」にあったと書かれている。だがどこにあったかは不明である。

現在は小さな祠を建て地蔵仏を祀り、写真を展示している。

下の写真はありし日の辻堂と地蔵仏である。

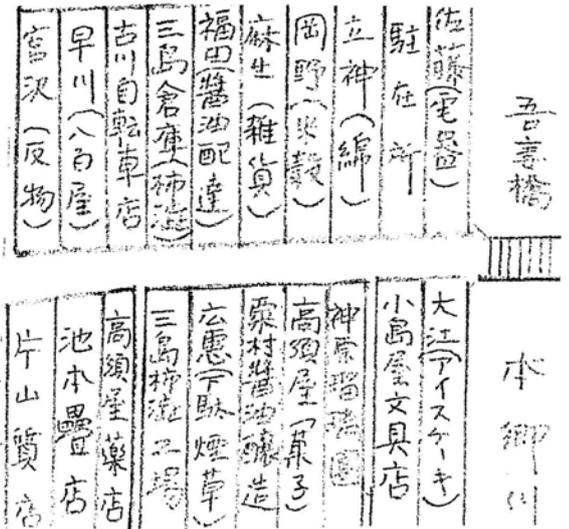


吾妻橋まで戻ってきて、今津の街道町並み風景を見る。



右に下ると辻堂跡が見える。

大正末期から昭和初期にかけての今津の町並み



薬師寺東の中世の往還道そばにある宝篋印塔と五輪塔。金江の叢江城主の墓だといわれている



「私塾大成館」の創始者「三吉傾山」(右)とその跡を継いだ「三吉冠山」の神道墓碑。門弟たちによって建之された。



十王堂ともいっていた辻堂が取り壊され、この祠で祀られている。祀りは「蓮華寺」の住職によって行われている。



薬師寺の楠木の巨木。福山市の保護樹木。

薬師寺（新熊野山 東方院 薬師寺）

元文元年（1532）に堂宇を焼失、同十二年四月に再建する。近世を通じて「薬師堂・護摩堂・鐘楼門」を次々と再建していった。幕末に梵鐘を供出したが、明治十三年に再建した。参勤交代時のころ、大分県中津藩の指定宿となる。幕末～明治・戦前にかけて茶会や俳句の会が盛んに催され、頼山陽もここで観月の詩会を開いている。寺の下に平櫛田中の養家があり、平櫛田中寄贈による桜の木彫り「薬師如来像」がある。



薬師寺の山門と鐘楼。薬師寺は「新熊野山 東方院 薬師寺」という。



▲ 傾山・冠山の墓碑遠望（明治27年）



眺めのいい場所にある句碑。「今日ばかり ひとも年よれ はつしく礼」とある。「明治四十一年晩春建之」

薬師寺の句碑

明治四十一年晩春に建立された円い句碑には「今日ばかり ひとも年よれ はつしく礼 羽州謹書」とあり、「泰々舎桃洲連中」と刻まれている。

羽州は名古屋の人で、作ったのは桃洲連中である。桃洲は松永の人で高諸神社の俳句額を撰し薬師寺の句会にも出席している。この碑は桃洲の一周忌に、桃洲が好んでいた芭蕉の一句を刻んだものである。

中世の往還道（山陽道）

宝暦年間（1760頃）、萩毛利藩の 有馬喜惣太 によって描かれた『中国行程記』には、今津村について「此辺昔海にて汐入で瀉の所、寛文中（1670頃）開作と成。往古は往還当初は山麓に之有由、開作以後今の新道往還となり」と書かれている。

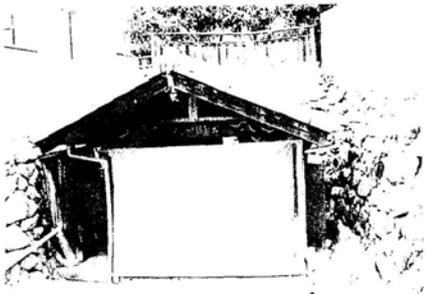
この薬師寺山門前の道を西に下って蓮華寺旧墓所前から「太多理河」の前を通過してバイパス南の丘を西村（西藤町）に抜ける道が中世の往還道と云われる。



薬師寺下の道（中世の山陽道だと云われている）



薬師寺西の東坂を行く。（中世の山陽道という）
右に見えるのは宝暦年間にあった蓮華寺の墓地である。
今津本陣を務めた河本家の墓もある。



これが「太多理河」(井戸)である。今も清冽な水が湧き出ており、利用されている。



水場の石は磨り減っており、長い間使われていたことが分かる。



王子山(王子丸公園)に上がっていた。向こうが蓮花寺になる。この場所に「宝篋印塔」があったと聞いている。

蓮華寺(新熊野山 西方院 蓮華寺)

真言宗の寺で「木造毘沙門天立像」は県重文で、平安初期の作りという。最古の記録では「文明三年」(1471)『西国寺文書』に「今津蓮花寺 栄尊」とある。

蓮華寺は脇本陣に定められ、書院造「上段の間」が残っている。宝暦三年に蓮華寺は焼失し宝暦十三年に再興される。この時、東坂の旧墓地附近にあった蓮華寺は、現在の王子山の地に移った。

嘉永六年(1853)ペリー来航により福山藩の供出命によって梵鐘を安政元年(1854)に供出したので鐘楼門は重心を失い倒壊した。昭和十九年に大阪市福島区玉川国民学校五年女子40人が蓮華寺と薬師寺に疎開してきた。



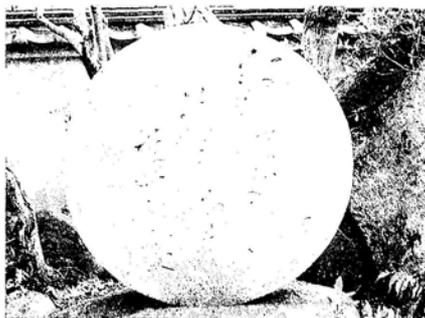
蓮華寺入口角にある碑。「今津宿脇本陣」とある。



蓮華寺の山門。以前、NHK TV番組の『山陽道歩き』で撮影されるようすを見に行った。



今津脇本陣であった蓮華寺の本堂。左側の部屋に「上段の間」が今も残されている。



石井瓢水の句碑。「あの外は 花月雪を遊びどこ 瓢水」裏側に「昭和十二年三月 石井黙庵瓢水翁句碑 敬慕者中」とある。



矢野梅哉の句碑。「老僧に なぐさめられし 墓参かな 梅哉」裏側には「昭和廿九年四月 梅哉矢野寛治郎翁句碑 有縁の友之を建つ」とある。梅哉の息子が硫黄島で戦死したので、その墓参りに来た時、薬師寺の老僧(先代鈴木宏道)に慰められたときの句である。



右が「阿弥陀堂」、左正面が「子安延命観音堂」(新しく建てられた) 正面が「合掌地蔵」、右奥が「六地藏」



熊野三所権現堂(右) 左は白龍権現堂。

学童疎開について

昭和19年に入ると本土空襲が激しくなり国民学校3年生以上の児童を地方に疎開させることになり、広島県では東部地域で大半を引き受け、寺院などを宿舎とすることになった。この地域では「大阪市福島区の児童4,250人を「沼隈、深安、芦品、御調」郡で引き受けた。昭和19年9月第1陣が到着し、今津町には大阪市福島区玉川国民学校5年生女子40人が疎開してきた。大阪より7時間かけての汽車による長旅で、柳行李一つのが持ち物だった。児童は薬師寺と蓮華寺にそれぞれ20数名ずつ分かれて分宿した。

学校は地元の国民学校へ通学した。



▲ 蓮華寺への疎開児童と教師



▲ 薬師寺への疎開児童・中段右から四番目 吉澤さん

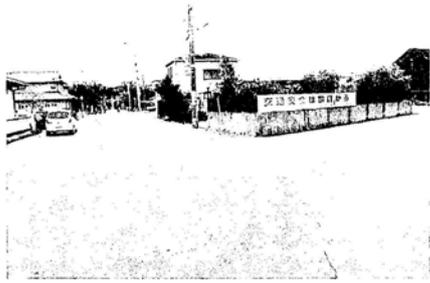
「ふるさと今津」より



蓮華寺下の今津街道の宿場らしい町並み風景。



高諸神社の参道。(別の絵図を参照してください)



今津宿場の旅籠跡。
この場所に「昭和20年頃「前元楼」(旅館)
があった。



高諸神社入り口の「たれ耳おすわり型
狛犬」
台座に「尾道」と刻まれているが、何だ
らうか？
「文久十年酉六月」とある。



王子丸からここに移された「寶篋印塔」
九輪がなくなっている。
室町後期のものか？



神社前の小山(駐車場のところ)に
あった「忠魂碑」
「昭和三年十一月十日」とある。
裏側に「陸軍大将 一戸兵衛 書」
とある。



内海亀祐の句碑。「佛心の 胸にお
どるや こひのぼり 秋声」とある。



内海亀祐は松永高等女学校の先生で「流
下式製塩法の発明、松永測候所の誘致」の
功労者である。
先生の還暦を記念して教え子らがこの句
碑を建つ。「昭和三十四年八月吉祥日」



今津小学校(旧校地)にあった「楠木正成
騎馬像」
戦前、今津小学校の奉安殿(昭和十年落
成)の横にあった。
今津町出身の「高垣波右衛門、浦上四郎
」によって寄付された。



県下で第三位の大きな「標柱」(注連柱)
高さ6m、幅62cmで地下3~4mも埋めら
れている。北木島産の石材である。



王子神社の鳥居と狛犬。
文久二年戊二月吉日の刻銘と「村上
重左衛門豊政」の名前がある。



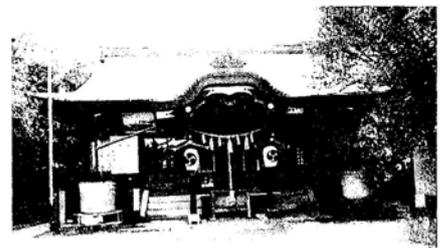
高諸神社が「沼隈郷社」だったころの碑。
街道の角にあった。



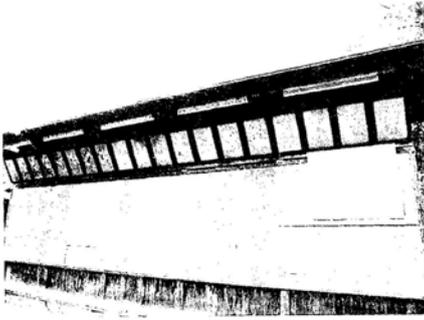
国道側の狛犬。「明治四拾年五月吉日」
とあり「尾道石工……」までは読めるが
そのあとの名前は判読できない。



福山市天然記念物「ハク」(柏)の木。
県下でも有数の巨樹で樹齢250年。



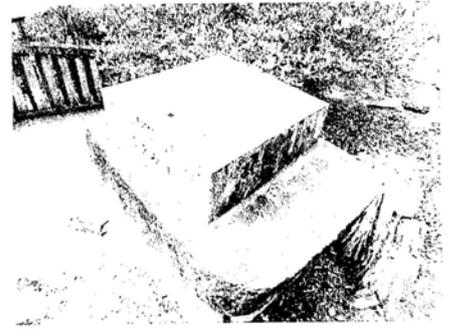
高諸神社の拝殿。拝殿にある絵馬も見よう。



赤穂浪士の絵馬。全部はそろってない。赤穂周辺の神社ではよく見かけたがなぜここにあるのかはわからない。



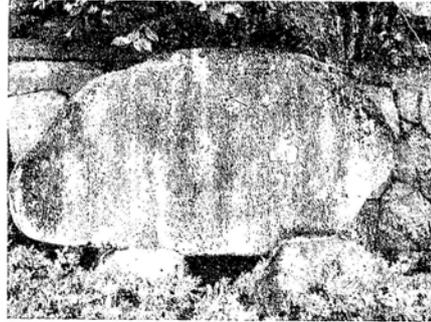
田盛神社。田盛大明神が祀られていて末裔が河本家といわれている。



日時計と思われる石造物。松永町の石工が製作している。



もと福田マネキ商店角の溝の上に立っていた「常夜灯」で「金刀比羅神社」と「末廣町」(松永町になる)と彫られている。



平井備南子の句碑。「雨あとの 昏れて祭りの 出足よき 備南子」今も発行している句誌『蘭殻火』を主宰。ホトギス同人で多彩な活動をしてきた。碑の裏には「昭和五十八年十月吉日 世話人代表岡田 拓 今津句会 駅前句会 蘭の花会」とある。岡田拓も地元の俳句会で活躍した人物である。



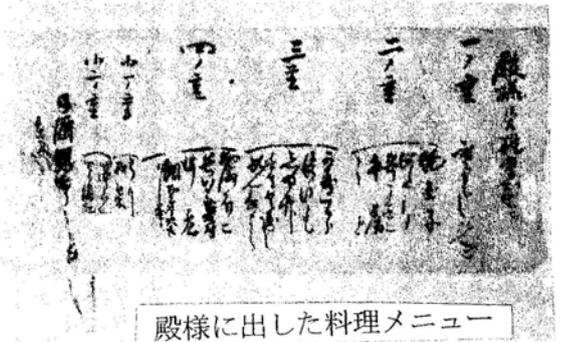
会報171号に「鳥居の年号に〈寛政十年十歳年〉と書いているが、『寛政十歳年』と訂正します。なお「王子神社前の鳥居には「石工山根傳馬」の銘は判読できなかったが、田盛神社の鳥居には「寛政十歳年 尾道石工山根傳馬」(□は読めなかった)とあるのを後日、確認した。



六十六部巡礼碑。詳しい話を楽しみに聞きましょう。



今津本陣跡(河本家) 明治四年の一揆で焼失したが、門は焼け残った。石垣も当時のままである。



殿様に出した料理メニュー



今津宿は間の宿で、休憩宿としての役割を担っていた。宿札には「有馬上総介休」と書かれてある。この「休」から宿泊地ではなかったことが分かる。

関札 (宿札ともいった)

宿場の本陣では大名が泊まるときに、このような関札を掲げた。今津宿は神辺から尾道の中間にあったので

「間の宿」という。本陣では大名が泊まったり休憩したりしたが、今津本陣は間の宿なので主に休憩した。

その宿札が今も残っている。今津本陣は河本家が代々務めていた。脇本陣は蓮華寺である。

「藤井高一郎」氏によると『今津本陣炎上』について4回あると記述している。その中でも「平成十二年一月十九日に起こった母屋裏の建造物一棟が全焼し貴重な文献資料があったが、その目録さえも確かでない……河本家に関する重要なものは事前に新築書庫におさめ無事であった。村方政用などの今津村の政治に関する物は姿を消してしまった」とある。

今津本陣跡（河本家）

明治四年の一揆によって本陣は焼失した。表門と石垣だけが当時の姿を残している。今津本陣は「牡丹の本陣」として知られていた。

一揆について記すと「明治四年、廃藩置県によって藩主阿部正桓が東京に移住することを知った藁江村（現金江町）の渡辺幾平が、藩主の上京を止めることを云いふらした。これを聞いた村人は『今、殿様に上京されると黒船や人さらいを防ぐことが出来ず女子どもは外国人に生き血を吸い取られる。殿様の上京を止めよう』と人々は福山城下に続々と集まった。

藩主阿部正桓が出ると渡辺幾平が進み出て『御殿様今日限り福山御立ちと聞く、かくては百姓共は今後親に離れて身のおきどころなく泣くに泣かれぬしまつに候へば今しばらく御留り下されし』と訴えお願いした。これに対して『願ひあらば村に帰って戸主にお願ひすべし』と諭した。

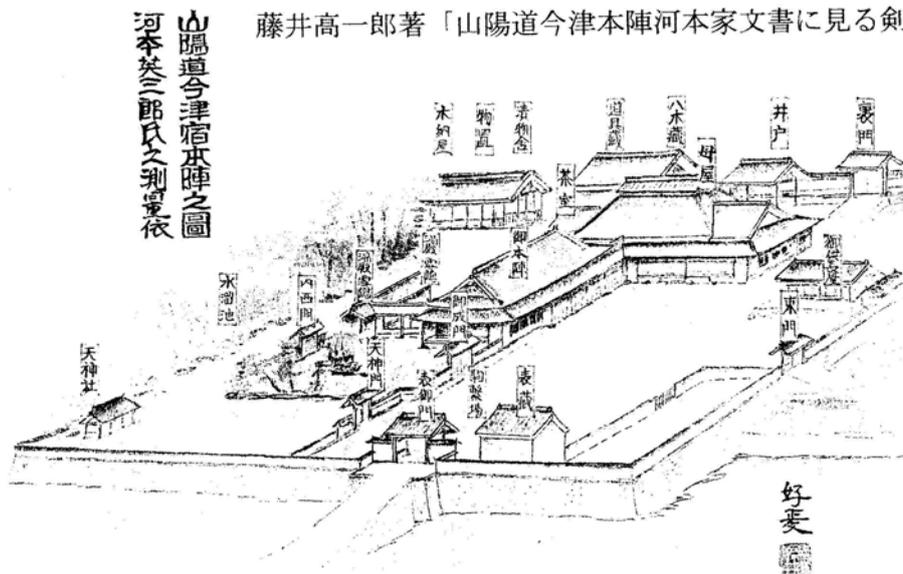
だが夜になって暴動となり、元郡代官など四郡宅に放火した。9月20日より沼隈郡山南村からおこり福山周辺から北部や府中の村々や町に広がり、村内の有力者や豪商・地主などが次々と襲われ広がっていった。松永湾岸地域では藁江村、金見村、柳津村、本郷村、高須村の庄屋や有力者宅が焼き討ち、打ちこわしの被害にあった。騒動は9月23日ごろにはおさまり、200人ほどが捕まった。

この騒動の背景には ①「藩主の上京を阻止することは、8月中旬に県北（北広島市）などの地域で起こった『武一騒動』の影響があること」 ②「藩主の上京を阻止して福山にとどまる願ひは、明治政府への不満からであること」

（福山市史 中巻）より

「河本家鳥瞰図」(焼失前)

藤井高一郎著「山陽道今津本陣河本家文書に見る剣社の祭礼写真より」



山陽道今津宿本陣之図について

河本英三郎（後河本家）が明治四年九月二十二日焼失した本陣屋敷の各構造物の配置を記録として実測し書き残していた。今津宿本陣表構が昭和五年九月二五日市史蹟として指定されるにあたって、その下調査の時、藤井高一郎が明治期の古新聞紙の間にはさまれていたのを見つけ、貴重な資料として考証し、その後歴史散歩のテレビ放映が企画された時、放映用に縮小図に画いたものである。

「藤井高一郎」氏による『今津本陣炎上』について4回あると記述している。その中でも「平成十二年一月十九日に起こった母屋裏の建造物一棟が全焼し貴重な文献資料があったが、その目録さえも確かでない……河本家に関する重要なものは事前に新築書庫におさめ無事であった。村方政用などの今津村の政治に関する物は姿を消してしまった」とある。



右の空き地あたりに「私塾 大成館」があった。向こうの農協あたりに「今津町役場」があった。



▲ 大成館塾跡（今津町742番地）
 註：左端は神村土井家から冠山先生の養子と
 なった、三代目 三吉謙助氏です。この家
 の右隣に塾生の寄宿舎があった。



▲ 三吉傾山先生

私塾 大成館創設者「三吉傾山」と「冠山」について

傾山の諱は定常、通称は熊八郎と言っていた。傾山は号である。菅茶山に師事し江戸で儒学と医学を学ぶ。元治二年に今津村に私塾大成館を開き指定の教育にあたる。

三吉冠山は諱は幹事といった。冠山は号である。福山誠之館に学び、明治11年東京に学ぶ。傾山死後、明治13年に傾山が創設した「大成館」を継承して、塾の拡張、充実に努めた。明治24年11月3日（松永～尾道間の鉄道開通式、川に落ちた近所の子どもを救ったが、自らは溺れて亡くなった。

明治26年10月、門人相諮り、冠山先生の碑を薬師寺の東側に建て、仁徳を偲んだ。

大成館の名声は周辺地域に響いていたため、各村々から塾生が参集し、塾生の村別人数は「今津22、松永22、瀬戸田19、本郷14、高須11、西村10、神村9、金江7などであった」なお昭和24年に開校した「学校組合立大成館中学校」の校名はこの私塾大成館に由来している。（ふるさと今津。青むしろ）より



右のJA今津支所前に今津町役場があった。



旧今津町役場「写真は今津公民館になっているときの写真 昭和41年頃」（ふるさと福山 郷土出版社より）



平櫛田中の碑。養家の平櫛家の跡に建てられている。



平櫛田中が岡山県井原市から養子に来て住んでいたわら屋根の家。昭和43年に取り壊された。片隅に記念碑が建っている。



地藏堂を見る。由来などについてははっきりと分からないので調べているところである。



三島柿渋屋の倉庫があり大きなホー口のタンクが在った。柿渋は醤油などの絞り袋や魚網の防腐用に使われていて、この地域では柿が多く植えられていた。



右の真ん中の家が「元粟村醤油屋」の建物だった。裏の倉庫があった場所に保育所が建てられている。



吾妻橋向こうに見える「備後今津郵便局」跡の建物。



▲ 元備後今津郵便局



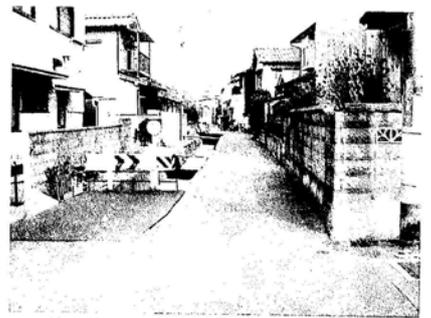
今津町の下町風景。戦前には、この通りが駅に行くメイン通りだった。



人気が高かった三階建ての「福田マネキ商店跡」この角のみぞ川の上に常夜灯と祠があった。道の左半分が溝で暗渠になり道が広がった。



古い民家が壊され、空き地が目立つ路地風景。



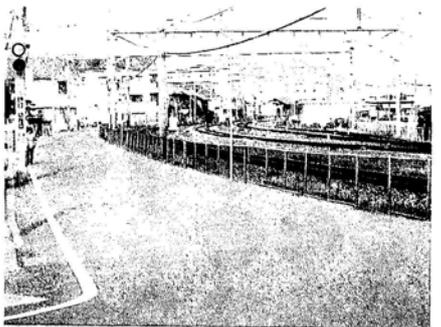
この先、少しだけみぞ川が残されている。進むと陸橋前になる。以前は線路より南側は入り川だった。



前回、見ている「左 松永停車場 大正二年一月 松永青年會」とある道標。



道標の向こうに「行先表示 ヨシ」の表示札がある。なんだろうか？



陸橋下をくぐると松永駅が見える。

〈追加資料と図〉

頼山陽薬師寺賞詩會百二十五年紀念大會

(青むしろ 昭和十年十二月號より)

戦前、薬師寺では度々、茶会が「対江庵」で開かれており、また「頼山陽薬師寺賞月詩會百二十五年紀念大會」を本堂、庫裡四か所を会場にして開いている。そこではどのような物が出品され展示されたのか？

これについて「青むしろ 昭和十年十二月號」にのっているので紹介しよう。

まず「村上正名」氏が大部分を占める出品物として、高須村「太田貝塚」や水呑の「白濱貝塚、洗谷貝塚」「大津野村貝塚」などから出土した「土器や石鏃」などが展示してある。

松永榮町、西町から石斧が、神村八幡社から「杯」(弥生式)が、窯跡出土品として赤坂村の長者ヶ原窯跡より「平皿、蓋」などの展示がある。

さらに神村西山の「三笠趾」「金比羅宮横窯趾」「火葬場付近」より出た「平瓶、蓋把手付、皿」や土器片として「神村狸之城窯趾」などからの出土品。「神村松本丸山古墳」よりの埴輪片、神村八幡社から布目瓦や丸瓦、草土千軒遺跡からの出土品もある。

その他「潮崎神社棟札八枚」(その中に寛文七年創建本殿 本庄重政の札もある) 寫本では「城主觸書ノ寫 享保ヨリ幕末迄一冊、備後古城記四冊」その他「明治九年沼隈郡村々地價表一冊」や古文書として「松永村代官秋山善六宛公私文書、但天和天禄年中」「富籤文書や明和七年秋百姓騒動之見舞手紙四枚」「松永塩濱史料」その他多くの「写本・古文書」や頼山陽、茶山などの遺墨、ぼう大な品々や作品、資・史料、写本が展示され、「遠く福山、尾道方面より技を曳くもの続々として會場は混雑するの盛況を呈したのであつた」と書かれていて「非常の成功を納め、備南空前の快舉と絶讃を博し得たるは、本社(青むしろ社)の頗る光榮とする次第である」(山内雄翠記)とまとめている、ことから多数の来賓も大成功だったことがわかる。

それにしても、見たい出品物もあり、今どうなってるのだろうか？気になったのである。

高諸神社の標柱〈注連柱〉

この標柱(注連柱)には「大正十四年六月吉辰」と彫られている。この標柱は県下で第三位の大きさをもつ標柱である。

この標柱を寄進したのは、柱の裏側に「麻生唯右衛門宗義建」とあるので「麻生氏」である。氏は明治20年頃の上阪して事業を成功させると大正10年に帰郷して巨大な「標柱と休み屋」を一人で負担し寄進したのである。

高さは6m、幅61cmで、地中に3~4m埋め込まれている。石工は側面に彫られている「矢野亀蔵工作」とあり、地元の石屋である。

標柱には「宣揚文」が刻まれているが難解で読みにくい。内容は「国家繁栄祈願、国家的事業紀念、凱旋紀念、神恩感謝、五穀豊穰、皇室繁栄」などの祈願や紀年に関するものが多い。これがなかなか読めないため気になり注意して見ている宣揚文である。

この標柱には「赫矣威靈傳寶劍」(赫矣 威靈寶劍ヲ伝フ)と「巍然廟宇帶卿雲」(巍然タル廟宇卿雲ヲ帶ブ)とある。

(神社に参拝した時、こうした宣揚文がスラスラと読めたらいいのにと思っているがなかなか読めないのが残念である。)

忠魂碑の「一戸兵衛」について

忠魂碑は神社などでよく見かけるが、「平和の塔」や「慰霊碑」の名前に改ざんされているものもある。その忠霊碑には「一戸兵衛書」とあるのが目につく。

その一戸兵衛であるが、嘉永七年に津軽藩士の子として生まれた。明治十年の西南戦争少尉として小隊を率いて戦っているがこれといった戦功を立てていない。

明治二十七年の日清戦争には中佐として活躍していて日露戦争開戦直前には少将に栄進して、金沢第九師団第六旅団長の地位に就いた。第九師団は乃木希典の第三軍の指揮下に入り旅順攻撃に加わるが、乃木の命令は「全滅を賭して攻撃の実行」という無謀な作戦で多大な犠牲を出している。だが一戸の部隊は猛攻撃によって盤龍山東堡類壘を占領する。さらに次の西堡壘の攻略も激戦の末に確保した。

第一回の総攻撃で唯一最大の戦果をあげた一戸少将は第二回総攻撃においても陣頭指揮を執り北堡壘も奪取する。n（ペー）堡壘攻撃ではロシア軍の反撃で後退寸前の時、一戸少将先頭に立って来援し堡壘を占領した。五十歳の少将が先頭で指揮して戦場を駆け巡ったことで要塞を完全に占領のであるから一戸は最大の殊勲者であり、のちにこの堡壘は「一戸堡壘」と命名された。

奉天会戦が終わると乃木大将の第三軍に参謀長に転じた。これは無能な伊地知幸介参謀長にとって代わったのである。

明治四十年に中将に昇進して、新設の姫路第十七師団長に就任した。四年後には大阪の第八師団長になり大正元年に東京の第一師団長になった。大正四年には軍事参議官となり大将に昇進したのち、教育総監兼務を命じられている。

大正九年に学習院長に就任すると後備に編入となる。それから明治神宮の二代目の宮司在郷軍人会会長努めている。

このような経歴（明治神宮宮司、在郷軍人会会長）によって、昭和三年の御大典のとき各地で忠魂碑が相次いで建立されたことから忠魂碑に一戸兵衛の名前を多く見かけるのであろうと思っている。（人物で読む「激闘の軌跡」日露戦争名将伝 PHP）より

松永地域の俳句会と句碑について

松永・今津の神社や寺院・公園などに句碑が建てられているのでよく見かける。このように多くの句碑が建立されているのは、戦前から松永地域で句会が活発に開かれ俳句が詠まれていた証で句碑の俳人は地元ではよく知られている人たちである。

そうした人たちの句集が作られ、吟行で詠んだ句などが編集された冊子も発行されている。この俳句活動の歴史を物語る「句碑」を見てほしい。現在も伝統俳句の流れを汲んでいる句会『蘭殻火』がこの地で活躍し、今も句誌の発行は続いている。

平成23年には「松永地区歴史・文化再発見の会」が句会『蘭殻火』と共催して俳句や松永の著名人に関する展示会と俳句について俳人協会会員、俳誌松風同人「野島英三」先生（俳号抒生）及び蘭殻火代表「佐藤浩子」先生による講演会を催した。

ところで松永地域で最も古い俳句は「文化十四年（1817）五月六日」の俳句額で高諸神社に奉納されていると松永町誌にはあるが、現在は見当たらない。

また幕末から明治にかけて『江煙社』が俳句同人として活動していたと書かれている。明治に入ると松永西町に「福田桃州」が地方俳句の巨匠と言われていて、泰々会桃州連中によって薬師寺から松永の街並みが一望できる眺めの良い場所に「今日はかり ひとも年よれ はつしく礼」、裏側には「明治四十一年」と彫られた句碑が建立されている。

この句は芭蕉の句である。昭和八年には郷土趣味雑誌『青むしろ』が出版され歴史や趣味、俳句を中心に郷土の事が掲載されている。この雑誌は「山内雄翠、矢野梅哉」たちによって発刊され昭和十年まで続いていた。

江川三昧はホトトギス派の同人で戦前、満州の大連で句誌『平原』を出していて中国（満州・華北）の風物を詠んだ俳句が中心である。また三昧は大連や奉天などで句会を開き高浜虚子を旅順に招いて歓迎句会を開いている。

戦後、引き揚げてくると松永でも活発な俳句活動を展開している。「満州や北支、郷土」編の個人句集『赤壁』を昭和二十九年に出版し、さらに俳句雑誌『花むしろ』も刊行するなど活躍して毎日新聞俳句選者にもなっている。

この花むしろ同人には「岡田一峰、平井備南子、藤村鶴意、山内照心居（雄翠）、富士谷御水、村上青史」など多彩な俳人が参集している。

句碑は高諸神社に平井備南子の句碑が、薬師寺には桃州に関連した芭蕉の句碑があり、さらに蓮華寺には矢野梅哉、石井瓢水の句碑二基がある。その他、高岩公園、神村八幡神社、本庄神社などにも建立されている。

また、松永地域の俳句界向上をめざして「高浜虚子」や「河東碧梧堂」などを迎え指導を受けている。

昭和二十四年には『青葉會』が創立され「山内照心居、矢野梅哉・天哉、島田陽州、梶田紫峰」など多くの俳人が集まっている。

この中で梶田紫峰は平成 23 年に宮中献詠勅題『雪』で『初空の 雪嶺雲を 近づけず』の句が第 1 席に入選した。その句は本郷の自宅庭園に句碑として建てている。また『一楽集』と称する回覧誌も月々回覧していた。

現在の松永俳句界では『蘭殻火』同人が継続的に活動している。蘭殻火は岡田一峰による主宰で創刊された。会誌蘭殻火は平成 23 年で通巻 584 号を数え、誌友は福山を中心に 76 名いて毎月 1～2 の句会を開きながら、また月 1 回の吟行も行っている。

会誌蘭殻火はホトトギス派でホトトギス会員や日本伝統俳句協会に加入している会員もいてそれぞれ投句している。

引用及び参考文献（「松永町誌」「青むしろ」「平原」「花むしろ」「赤壁」「蘭殻火」「松永の展望」など）

引用文献・図書・資料

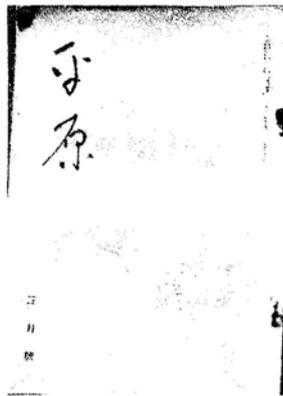
- | | | |
|--------------------|--------|------------------|
| 「ふるさと今津」 | 「松永町誌」 | 「福山の文化財」 |
| 「松永歴史と文化再発見の会〈図書〉」 | | 「青むしろ 昭和八年～十年」 |
| 「日露戦争名将伝 PHP 文庫」 | | 「福山のいしぶみ散歩 佐野恒男」 |
| 「ふるさと福山 郷土出版社」 | | 「松永の展望 中国観光地誌社」 |
| 「福山市史」 | | 「福山歴史散歩」 |



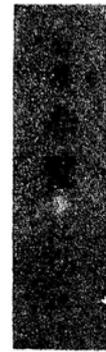
青むしろ 趣味同好會 青むしろ社機關紙 十月号(昭和八年十月五日發行) 表紙繪 三上春洋 (口繪に「鞆附近の眺望 大村廣陽畫伯」 「蕉翁像 平柳田中刻」の写眞がある。



青むしろ 皇紀二千五百九十五年 五月号(昭和十年五月一日發行) 青むしろ社主幹立神正夫、理事長金原俊郎 常務理事山内三二、矢野光治、富士谷政雄、牧平雅美、村上一夫、理事に18名の人がなっている。



平原 五月号 昭和九年五月一日發行 編輯人江川一三 (三昧) 發行所大連市眞金町



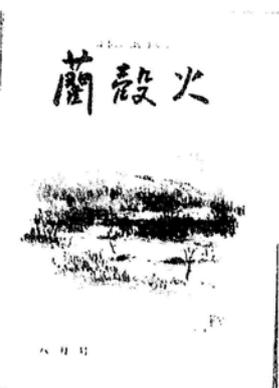
句集赤壁 江川三昧 昭和二十九年八月發行 「平原」(満州篇)、「春聯」(北支那篇)、「花むしろ」(郷土篇)がまとめられている。



俳句雑誌花むしろ 七月号 昭和三十三年七月一日發行 編輯兼発行人江川三昧



ガリ版刷り印刷の句誌 蘭殻火 第二巻12月号 昭和三十九年十二月二十日發行

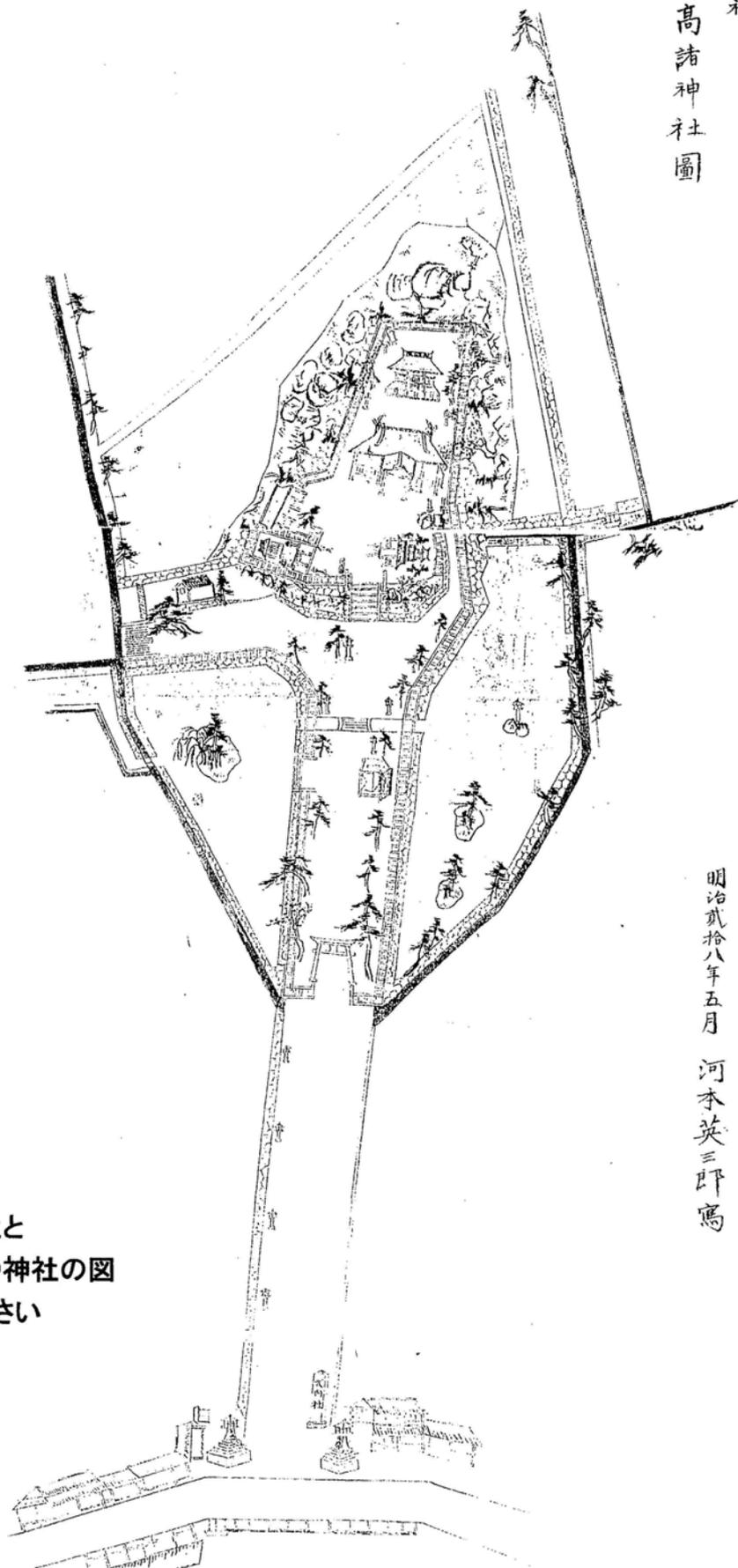


日本伝統俳句文芸誌「蘭殻火」 八月号(平成二十三年八月一日發行) 表紙の画は松岡富士則先生

句集鷺籠 岡田一峰 昭和四十四年九月十一日發行 「高浜年尾」の序文に「句はホトトギス雑詠入選の句を主としてある」と書かれている。

句集「風入」 野島抒生 (私家版) 2012年2月10日發行 「戦前・戦中・戦後を生き抜いてきた折々の作品を句集として綴りました」とある。

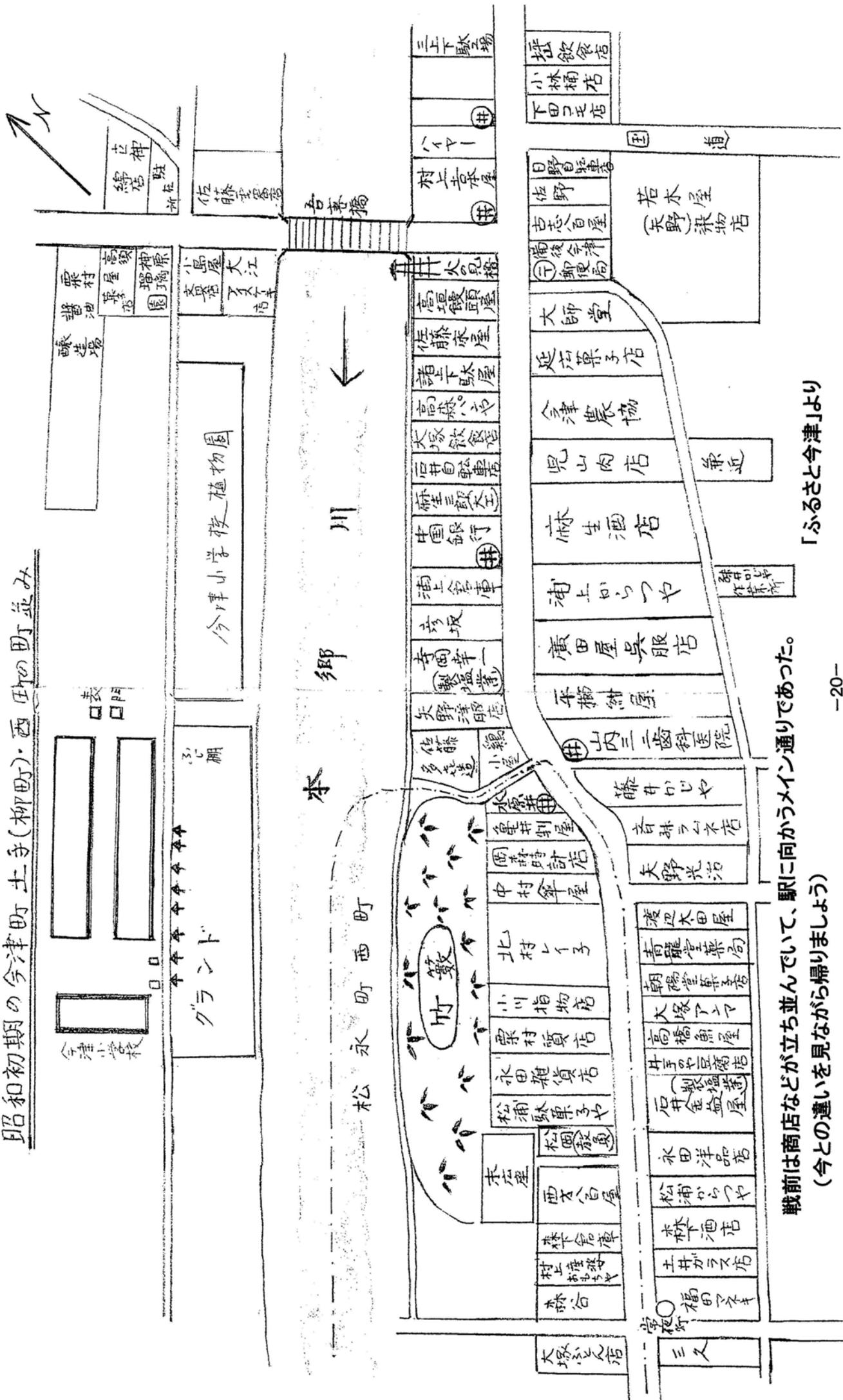
沼隈郡郷社
式内高諸神社圖



明治貳拾八年五月 河本英三郎寫

現在の高諸神社と
明治貳拾八年の神社の図
と比べて見て下さい

昭和初期の今津町土手(柳町)・西田町並み



「ふるさと今津」より

戦前は商店などが立ち並んでいて、駅に向かうメイン通りであった。

(今との違いを見ながら帰りましょう)

おまけの資料

今津村について（現福山市今津町）

本郷川（以前、今津地域では今津川と言っていた）が村内を流れ松永湾に入っている。

『備陽六郡誌』には「寛文の頃まで此辺は遠干潟にて、宗四郎屋敷の門前迄人河也けるか、潟は田畠となり、河は町屋建並ひ九州往還の駅となりて河本といへる形もなし」と記されている。宝暦年間（1751—64）に有馬喜惣太の『中国行程記』にも「此の辺昔海にて汐人て潟の所、寛文年中開作と成、往古は往還当所の山麓に有之由、開作以後今の新道往還となり」書かれている。

元和五年（1619）の備後国知行帳では513石余、元禄十三年（1700）には934石余と増えている。『備陽六郡志』によると内訳は「田方710石余・畠方223石で、総高でわずかに減じている。『福山志料』による戸数301、人口1531、牛31、馬13、となっている。

近世には山陽道の宿で、神辺と尾道宿の中間で「間の宿」で、今津宿から福山城下の間は三里一五町余で本馬だと一〇六文・軽尻一〇文・人足銀一匁二厘である。

「小説 関藤藤陰伝（老年時代） 水上の杯」（第三巻 栗谷川 虹）には次のようなことが書かれている。

（P266）・・・（長州の参謀）杉孫七郎は尾道を発し、山陽道を東へ二里、今津宿の劔神社前にある田新なる旅館に入った。福山城へはあと三里である。

・・・・・・・・馬で再び西に向かった大森操兵衛は、杉孫七郎が陣取る今津宿の田新という旅籠におもむき、なおも杉孫七郎に面会を求め続けた。

操兵衛の『手録』にはこうある。「駅吏を以て面見を請ふ。孫七郎許諾す。五更（午前三時～五時）に至るもいまだ面見を得ず。これを催すこと六、七回。いはく『今止むべからざることあり、こと終われば則ち、面見せん』と。爾後幾回これを催すといえども言、前のごとし」

田新旅館の前の小旅籠に陣取った操兵衛が、ふと気付くと、戸外が騒がしい。見ると、銃を肩にした長州兵が集合、街道に東向きに整列し始めている。明々と松明がとまり、行列の先頭は、二階の小窓からも目が届くが、後方は陸続と遙か闇の中に連なっている。

もはや猶予はならなかった。

操兵衛は、杉孫七郎との面談を諦め、馬に飛び乗って駆け出した。

・・・・・・・・今津宿から三里の道を駆け通し、操兵衛の馬が福山城下にはいったのは、空が漸くほの白みはじめたころであった。慶応四年（明治元年）一月九日の仏暁である。

（この小説の舞台になっている田新旅館が「前元楼」という旅館に当たるかは不明だが昔からあった旅籠であることは間違いないのでここが小説に取り上げられた旅館跡だと思っているが、どうだろうか？）